



## 灰峰山西教寺第十五世住職 釋正衛（深廣院） 四千九日法要

父岩崎正衛（前住職）は、一九三二（昭和六）年、広島市で昆布問屋を営む坂田家の二男として生を受けました。ご法義な（信心深い）祖父の膝の上で口伝えに正信偈を習い、篤信な母に手を引かれて、広島別院をはじめ、あちこちのお寺でお聴聞（法座）のご縁にあいました。小学校は浄土真宗の私立光道小学校に入學、安芸門徒の温かく深い土徳の中で育てられ、広島一中を卒業するころには、浄土真宗の僧侶を志すようになりました。龍谷大学に進学し大江淳誠教授に師事しました。さらに同大学院博士課程、本願寺派宗学院で学び、本場で聖典意識の編纂に携わりました。

その後、大江教授の紹介で岩崎俊雄（當寺十四世・

勸学）の長女ヤヲと結婚し、長女マヤと長男寧（智寧）を授かります。

入寺してからは、休止していた日曜学校を復活させ、仏の子どもを育てました。さらに壮年会や若妻会（後の初音の会）を結成、町のあちこちに法座ピラをはるのを始めたり、寺報（最初はガリ版印刷でした）を発刊するなど、熱心に強化活動に取り組みました。父本人は「和上（前々住釋俊雄）さんのされた通り」と言っていました。今思うと本当にいろいろ頑張ったものだと思えます。お通夜やご法事などで全員が聖典を持つておつとめするのは、今日の西教寺では当たり前のことですが、前住職が取り組むまではそうではあり

ませんでした。仏法は、僧侶が主役で門徒はおまけではなく、ひとり一人が主役、如来の正客であるという浄土真宗の基本姿勢、安芸門徒の精神を西教寺に届けてくれました。

このたび、父が大切にされたこの姿勢を受け継ぎ、お葬式も皆でいっしょにおつとめできるよう『葬場勤行集』をお配りすることになりました。左の「直入彌陀大會中」のご文は、『葬場勤行集』に載ってませんが、西教寺のお葬式で読む廻向句です。前々住(俊雄・會中院)と前々坊守(ナオ・直入院)の院号の出扱でもあります。点線で切つてどうぞ『葬場勤行集』にはさんでおいってください。

一九八〇(昭和五十五)年に住職を継職してからは、長ノ木本坊庫裏・蔵本通支坊本堂を新築、二〇〇六年には老朽化し芸予地震会で使用不能となった長ノ木本坊本堂の修復を成し遂げました。

お寺以外でも真宗学寮や広島仏教学院、正信会(五十九ヶ寺からなる安芸南組若手僧侶の勉強会)で後進の育成に努力しました。その他安芸南組の組長や保護師、教誨師、呉同済義会理事など、世の中が安穏となり、仏法が弘まると思えば何でも積極的に引き受けました。戦争、原爆を経験しており、特に平和問題には積極的に発言しました。晩年は、本坊の勉強会で近隣の若手僧侶と話をするのを楽しみにしていました。

父は最期まで在家安芸門徒の目線で物を見、人に接した人だったように思います。そう思つて見直すと、今日の西教寺にはいたるところに父の大事にしてくれたことが結実しているように感じることです。裏表のない性格で、行年九十一(満八十九)歳で西帰するまで、皆さんからよく慕われ、大事にしていたきました。心より御礼申し上げます。合掌称名(釋智寧・住職)

### 廻向句

直入彌陀大會中 (仏に従ひて須臾に宝國に在り  
たたちに弥陀大會のなかに入りて)  
見佛莊嚴無數億 仏の莊嚴の無數億なる  
を見見る  
三明六通皆具足 三明六通みな具足して  
憶我闍浮同行人 わが闍浮の同行人を憶ふ  
(善導大師『法事讚』)

一聞是法而不忘  
この法を聞きて忘れず、

同音  
一便見敬得大慶  
すなはち見て敬ひ得て  
大きに慶ばば、

一則我之善親厚  
すなはちわが善き親厚なり。

一以是故發道意  
これをもつてのゆゑに道意  
を發せよ。  
(『平等覺經』)